

受験番号

23

中

国語 その一（八枚のうち）

一

次の文章を読んであとの質問に答えなさい。

「利他」の反対語は「利己」とされています。「あの人は利己的だ」というと、自分のことばかり考えて、他者のことは顧みない人を批判する言葉ですよね。これに対して、「あの人は利他的だ」というと、自分の利益を放棄して、他者のために尽くす人を称賛する言葉になります。なので「利他」の反対語は「利己」。そう認識されています。

確かに、表面的には「利他」と「利己」は対立しているように見えます。両者は真逆の観念で、一方は称賛され、一方は非難されます。

しかし、どうでしょうか。

例えば、ある人が「評価を得たい」「名誉を得たい」と考えて、利他的なことを行っていたとすると、その行為は純粋に「利他的」と言えるでしょうか？ 行為自体は「①」的「だけども、動機づけが

「②」的な場合、私たちはどのような思いを抱くでしょうか？

おそらく、そのような行為は、③「的だと思なされるでしょう。一見すると、④「的なことを行っているのですが、端々に「いい人だと思われない」「称賛を得たい」というような下心が見え隠れしていると、やはりその人は「⑤」的な人」と見なされるのではないのでしょうか。「あの人が褒められたいからやっただけだよ」と思うと、途端に「利他的な行為」がうさん臭く見えますよね。その行為を「利他的で素晴らしい」と手放しで礼賛する気にはならないでしょう。

近年、大手企業は「社会的貢献」を重視し、様々な取り組みを行っています。例えばSDGsという言葉で、最近よく目にします。これは「持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals)」のことで、貧困、紛争、気候変動、感染症のような地球規模の課題に対して、二〇三〇年までに達成すべき目標が設定されています。企業はこのSDGsにコミットしていることを強調し、自社の取り組みをアピールしています。

どうでしょう？

この取り組みを見ていて、「なんと利他的で素晴らしい企業なんだろう」と心を動かされるでしょうか。もちろんほとんどの取り組みは素晴らしい事業で、実際、大きな貢献を果たしていると思います。SDGsにかかわらず、行動を起こすことはとても大切なことです。

しかし、どこかで「何かうさん臭いな」という気持ちを持ってしまうことはないでしょうか。結局のところ、企業のイメージアップのために「社会的貢献」を行っているだけで、それって企業の利潤追求の一環だよ、という冷めた見方を、私たちはどこか心の片隅に持っているのではないでしょうか。

正直なことを言うと、私はそう思っています。特に「社会的貢献」の成果を、CMや広告でことさら強調されると、どうしても企業の「利己性」を感じてしまいます。

——「利他」と「利己」。

この両者は、反対語というよりも、どうも*メビウスの輪のようにつながっているものようです。

*礼賛……ほめたたえること。

*コミット……取り組むこと。

*メビウスの輪……帯を一回ひねって、一方の端の表と他方の端の裏を貼り合わせた時にできる輪。

国語 その二（八枚のうち）

利他的なことを行っているとしても、動機づけが利己的であれば、「利己的」と見なされますし、逆に自分のために行っていたことが、自然と相手をケアすることにつながっていれば、それは「利他的」と見なされます。

「利他」と「利己」の複雑な関係を認識すると、途端に「利他」とは何か、わからなくなってきました。

「利他」の問題を考える際、私がとても重要だと考えている一冊があります。頭木弘樹さんの『食べる」と出すこと』です。

頭木さんは、二十歳のときに潰瘍性大腸炎を患い、五十代になった今も、病気と付き合いながら生活しています。そのため、何でも食べられるわけではなく、「これを食べると激しい腹痛や下痢になる」というものがあります。

あるとき、頭木さんは仕事の打ち合わせで、食事をすることになりました。指定の店に行くと、すでにお勧めの料理が注文されており、頭木さんが選ぶことができない状態でした。注文された料理が出てくると、それは食べることができないものでした。

相手は「これおいしいですよ」と、頭木さんに勧めます。ちなみに、その人は頭木さんが難病を抱えており、食べることができないものがあることを知っています。頭木さんは「すみません。これはちよつと無理です」と答え、食べられないものであることを伝えました。

相手は「ああそうですか。それは残念です」と答え、その場はいったん収まったものの、しばらくすると、また同じものを勧めてきました。「少しくらいなら大丈夫じゃないですか」と言って、食べることを促します。難病を抱える頭木さんにとって、その料理を口にするには、いくら「少しくらい」であつても、大変な不調をきたすことにつながり、どうしてもできません。そのため、手を付けないままにしていると、周りの人まで「これ、おいしいですよ」とか「ちよつとだけ食べておけばいいじゃないですか」とか言いながら、同調圧力を強めてきます。その場は、気まずい雰囲気になり、結局、その相手からは仕事の依頼はなくなったと言います。

この相手の行為は、「利他」と「利己」の問題を考える際、重要な問題を含んでいます。

確かに相手は、頭木さんに「おいしいものを食べさせたい」という利他的な思いがあつたのでしよう。だから、自分で店を予約し、お勧めの料理を前もって注文するという手間のかかることを行つたわけです。ただし、いくら他者のことを思つて行つたことでも、その受け手にとって「ありがたくないこと」だったり、「迷惑なこと」だったりすることは、十分ありえます。実際、頭木さんにとって、食べられないものを食べるように勧められることは、迷惑どころか、場合によっては命の危険にさらされる危険な行為です。当然、受け入れることはできません。

しかし、相手の「お勧め」を断ると、場が気まづくなります。そして、自分の思いが受け入れられなかつた相手は気分を害し、徐々に「利他」の中に潜んでいた「利己」を前衛化させていきます。頭木さんの病気を熟知している上、「食べられないものだ」ということを知らされても、時間が経つと「少しくらい大丈夫なんじゃないですか」と言つて、自己の行為を押し付けようとします。こうなると、「この料理を食べさせてあげたい」という「利他」が、「自分の思いを受け入れないなんて気に入らない」「何とかおいしいと言わせたい」という「利己」に覆いつくされ、頭木さんに襲いかかつてきます。利他的押し付けは、頭木さんにとっては恐怖でしかありません。

国語 その三（八枚のうち）

この*エピソードは、利他を考える際、大切なポイントをいくつも含んでいます。

まず考えなければならぬのは、「支配」という問題です。「利他」行為の中には、多くの場合、相手をコントロールしたいという欲望が含まれています。頭木さんに料理を勧めた人の場合、「自分がおいしいと思っているものを、頭木さんにも共有してほしい」という思いがあり、それを拒絶されると、「何かおいしいと言わせない」という支配欲が加速していきましました。相手に共感を求める行為は、思ったような反応が得られない場合、自分の思いに服従させたいという欲望へと容易に転化することがあります。これが「利他」の中にも含まれる「コントロール」や「支配」の欲望です。

ここでとても参考になる古典があります。マルセル・モースが一九二五年に出版した『贈与論』です。モースは古今東西、様々な贈与体系・慣習を比較することで、その価値を再評価したのですが、『贈与論』は手放しの「贈与礼賛論」ではありません。むしろ、贈与の持っている危険な側面も、同時に追究している点が重要です。

モースは、『贈与論』出版の前年に「ギフト、ギフト」という論文を書いています。彼は冒頭で次のように述べます。

さまざまなゲルマン語系の言語で、ギフト(gift)という一つの単語が「贈り物」という意味と「毒」という意味と、二つの意味を分岐してもつようになつた。

ん？ 何気ない一文ですが、とても物騒なことが書かれていますよね。「ギフト」という単語には二つの意味があり、一つは「贈り物」、そしてもう一つは「毒」だと述べられています。

「贈り物」は、一般的に相手に対する好意に基づいて行われると思われています。実際、私たちも、誰かに「贈り物」をする際には、「喜んでくれるかな」とか、「めでたいのでお祝いをしたい」とか、思いますが、思いませんよ。

しかし、この「贈り物」の中には、時に「毒」が含まれていると、モースは指摘します。一体、どういうことでしょうか？

私たちは「贈り物」をもらったとき、どういう気持ちになるのでしょうか。まずは、「うれしい」という感情が湧き上がり、相手に対する感謝の念が湧き起ると思います。心から「ありがとう」と思い、涙が流れることもあります。

しかし、少し時間が経つと別の感情が湧いてくることになります。

——「とてもいいものもらったのだから、お返しをしないとイケない」。

今度は自分があげる番だ。もらったものに匹敵するものを「返礼」として渡さないといけない。そんな思いに駆られるのではないのでしょうか。

これは結構なプレッシャーです。

今はインターネットという便利なものがあり、もらったものの価値や値段が、検索すればすぐにわかってしまいます。

例えば、もらったものが、一万円で売られているものだとわかったとしましょう。この瞬間、二つの引き裂かれた感情が湧き上がるのではないのでしょうか。それは「えっ！ そんなに高価ないいものをくれたんだ」といううれしさと、「そんな高価なものもらったんだから、自分も高価なものを返さなくては

*エピソード……短い話。

国語 その四（八枚のうち）

けない」というプレッシャーです。この両方が同時に押し寄せてくるだろうと思います。

もし、自分に金銭的余裕がなく、十分なお返しができない場合、プレッシャーはさらに大きなものになります。そして、実際にお返しを渡すことができないと、自分の中で「負い目」が増大していきます。本当はプレゼントとしてももらったのに、なぜかそれが「負債」のような感覚になり、心の錘おもりになっていったりします。

ここで、この両者の間に何が起きているのでしょうか？

それは与えた側がもらった側に対して「優位に立つ」という現象です。もらった側が、十分な返礼がでないでいると、両者の間には「負債感」に基づく優劣関係が生じ、徐々に上下関係ができていきます。これが「ギフト」の「毒」です。

この「毒」は、溜まれば溜まるほど、相手を支配し、コントロールする道具になっていきます。「贈与」や「利他」の中には、支配という「毒」が含まれていることがあり、これが「利他」と「利己」のメビウスの輪となつていきます。自分の思い通りに相手をコントロールしようとする「ギフト」は、「利他」の仮面をかぶった「利己」ですよ。

このような「支配」や「統御」の問題は、利他と深くかかわるケアの場面で先鋭化するように思えます。

例えば、認知症患者のケアについて、考えてみたいと思います。

認知症の人たちは判断力や記憶力の低下から、時に思いもしない行動を起こすことがあります。事故の危険性につながる行動があったり、徘徊をして帰ってくることでできなくなったりするケースがあります。

そんな場合、時に「身体拘束」が行われます。ひもや抑制帯、ミトンなどの道具を使用してベッドに縛つたり、向精神薬を飲ませて動けなくしたりすることがあります。また、徘徊防止のために、部屋から出ようとするとブザーがなるというようなケースも「身体拘束」と見なされることがあります。

二〇〇〇年四月に施行された介護保険法では、介護施設での身体拘束は原則禁止とされています。しかし、拘束をしなければ本人の安全が守れないと判断された場合には、必要最低限の身体拘束が認められています。「切迫性」「非代替性」「一時性」の三点が要件とされていますが、基準は明確なものではなく、施設運営の効率化という側面から、身体拘束が採用されているケースがあります。

これはケアの中に「統御」が介在するもので、認知症患者にとつては、「支配されている」「服従させられている」という感覚になり、症状の悪化を引き起こす可能性があります。もちろん施設の事情もあり、苦渋の決断という側面もあると思いますが、人間の尊厳を損ねてしまうことは否めません。

一方、異なるアプローチで認知症の人たちのケアを実践している人たちがいます。私が注目しているのは「注文をまちがえる料理店」という活動を行っている人たちです。これは認知症の人たちが*ホールスタッフを務める期間限定のレストランで、注文していない料理が出てきても、客側がそれを受け入れることで成り立っています。認知症の人たちは、労働による賃金を得ることができ、客側は間違いに寛容であることの大切さを学びます。

*統御……コントロール。

*アプローチ……目的を達成するための手法。

*ホールスタッフ……接客係。

国語 その五（八枚のうち）

私の研究室の卒業生に、蔭久孝統さんという人がいます。彼は修士論文で「注文をまちがえる料理店」に注目し、「認知症ケアと社会的包摂——注文をまちがえる料理店の事例から——」という論文を書きました。この論文が素晴らしいので、少しご紹介したいと思います。

蔭久さんは、「注文をまちがえる料理店」の*コンセプトを一部取り入れて運営されている「ちばる食堂」（愛知県岡崎市）に注目します。ここは常設の飲食店として、認知症と診断された高齢者と雇用関係を結んでおり、調査時には男女各二名の計四名がホールスタッフとして勤務していました。

ホールを任された認知症の人たちは、あくまでも注文を間違えないように仕事をします。「ちばる食堂」は、福祉目的で運営されている食堂ではなく、ごく一般的な沖縄料理店として運営されています。そのため、客の多くは入店するまで、この店の特徴を知りません。お店のメニューに書いてある注意書きと働いている人の姿を見て、そのことを知ります。

「ちばる食堂」の経営者で、厨房で料理を作る市川貴章さんは、四人の従業員について、次のように述べています。

認知症と診断されても、認知症と診断されていなくても

『働く能力』は一緒だということがこの一年で分かりました

と、共にこれまでの経験がちゃんと出るんだなということもよく分かります

カラオケ喫茶を営んでいたBさん（女性、仮名）は

昔の経験から接客から皿洗いなどチャキチャキと働けますが

サラリーマンだったCさん（男性、仮名）は家事をあまりしてこなかったのか

少し苦手ですが、箆袋に箆を入れたり作業的なことはとても得意です

水を出したりすることは忘れちゃうけど、注文をとることは忘れません

若干の人見知りで、積極的には話しませんがとてもユニークな人です

逆にAさん（男性、仮名）は、積極的に若い女の子をめぐって話に行き、その席から離れない積極性が

ありますが、注文をとるのがちよつと苦手です

お客さんには、エプロンのポケットに入ってる注文表をもつけてもらいたい書いてもらえると助かります

Dさん（女性、仮名）は、皿洗いさせたら食洗機より早く丁寧に洗います

長年やって来たんだなあつてことが分かる

一番見てて面白いのは、13時くらいになると僕の顔と時計を交互に見る時が来て。あえて『どうした

の？』って聞くと

『お腹がペコペコ』です！って笑顔でいうから

（中略）

特別な何かをするわけではなくて

その人を知り、その人が一番本領発揮できる場面にいれるようにする。

あとは、僕は麺を茹でるだけ（「Kaigoブログ」二〇二〇年三月十三日、原文のまま）

市川さんは、東海テレビの取材の中で、「介護をしないのが本当の介護だと思って」いると述べ、自分
はできるだけ厨房から出ず、「後はお客さんに手伝ってもらえれば、それでいいのかなと思っています」と

*コンセプト……基本的な考え方。

国語 その六（八枚のうち）

語っています。

市川さんのケアは、「統御」ではなく「浴うこと」に主眼が置かれています。それぞれの人が持っている能力を引き出し、主体性が喚起されることが目指されています。

論文を書いた蔭久さんは、認知症のホールスタッフの人たちが、自分の仕事に誇りを持ち、店を支える一員としての*矜持を持っていることに注目します。そして、その姿勢が、間違いに寛容な店内のあり方を*醸成していると論じています。

認知症と診断されると、周りの人や介護従事者は、認知症の人たちに「何もしないこと」を強要してしまいがちです。仕事をすることから遠ざけ、掃除や洗濯、食事など日常生活にかかわることも、何でもやっただけ。それが「ケア」だと思われてきた側面があります。これに対して「ちばる食堂」では、間違いに寛容な社会を形成することで、認知症の人たちも尊厳を持って働くことができる環境を整えようとしています。そのことで、当事者が持つているポテンシャル（潜在能力）を引き出す。その人の特質やあり方に「浴う」ことで、「介護しない介護」が成立する場所を作ろうとしています。

さて、頭木さんのエピソードに戻りたいと思います。

頭木さんの悲劇は、レストランで出てきた「お勧めの料理」が、食べられないものだったことよって生じたものでした。さて、です。

もしこれが食べられるもので、頭木さんが「おいしい！」と感激していたら、どうなっていたでしょう。その場は和気あいあいとしたものになり、相手と頭木さんの関係も良好に推移したかもしれません。頭木さんも「あんなおいしいものを紹介してもらえて、本当にありがたい」と思ったかもしれません。その場合、相手の行為は「利他的なもの」と捉えられ、感謝の対象となったでしょう。

しかし、この場合、「お勧めの料理」は、残念ながら頭木さんの食べられないものでした。そのため、相手の行為は「利他」の方向へと流れていかず、むしろ「利己」的側面が際立つ結果になりました。

ここから見えてくるのは、特定の行為が利他的になるか否かは、事後的にしかわからないということですが、いくら相手のことを思ってやったことでも、それが相手にとって「利他的」であるかはわかりません。与え手が「利他」だと思った行為であっても、受け手にとって*ネガティブな行為であれば、それは「利他」とは言えません。むしろ、暴力的なことになる可能性もあります。いわゆる「ありがた迷惑」というものです。

つまり、「利他」は与えたときに発生するのではなく、それが受け取られたときにこそ発生するのです。自分の行為の結果は、所有できません。あらゆる未来は不確実です。そのため、「与え手」の側は、その行為が利他的であるか否かを決定することができません。あくまでも、その行為が「利他的なもの」として受け取られたときにこそ、「利他」が生まれるのです。

（中島岳志の文章による。なお、本文には一部省略したところと、表記を改変したところがある。）

*喚起……呼び起こすこと。

*矜持……誇り。

*醸成……しだいに作り上げていくこと。

*ネガティブ……否定的。

23	受験番号
中	

国語 その七（八枚のうち）

問一 空欄①～⑤には「利他」か「利己」のいずれかの語が入ります。解答欄にどちらの語が入るかそれぞれ書きなさい。

①
②
③
④
⑤

問二 「私はそう思っています」とあるが、どのように思うということですか。

問三 「利他的押し付けは、頭木さんにとっては恐怖でしかありません」とあるが、それはどういうことですか。

問四 「この『贈り物』の中には、時に『毒』が含まれていると、モースは指摘します。一体、どういうことでしょうか？」とあるが、筆者の考える答えを説明しなさい。

23	受験番号
中	

国語 その八（八枚のうち）

問五「市川さんのケアは、『統御』ではなく『浴うこと』に主眼が置かれています」とあるが、それはどういふことですか。

問六「その行為が『利他的なもの』として受け取られたときにこそ、『利他』が生まれるのです」とあるが、それはどういふことですか。

二

次の各文のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① 行事が雨天ジュンエンとなった。
- ② 校内のフウキを乱すようなことをするな。
- ③ 武力行使もジさない姿勢を示す。
- ④ 神仏をオガむ。
- ⑤ 書類をユウソウする。
- ⑥ ニューシが生え替わる。
- ⑦ 無病ソクサイをいのる。
- ⑧ 海洋資源のホウコ。

⑤	①
⑥	②
⑦	③
	さない
⑧	④
	む